

巻頭エッセイ

雑誌『郵政』表紙原画コレクション — 通信事業と美術との関連の一側面 —

田良島 哲

1 はじめに

通信事業と美術との間には、歴史的に深い関わりがある。欧米より少し遅れて近代の情報通信システムに参入した日本でも同様であった。世界中に流通する切手や葉書といった用品に描かれた意匠が、一国の文化的な水準の表象として受けとめられるという事実を、まずは当時の通信当局者が認識したことについては、『通信事業史』が、明治中期以降「切手は意匠図案や印刷に依つて其の国柄や、工芸発達の程度を示すものであるといふことに気附いて来た」と述べている⁽¹⁾ところからもうかがえる。

このような通信と美術との関係は、事業全体に幅広く影響を及ぼし、今の郵政博物館に、いくつもの興味深いコレクションが蓄積されるに至っている。最近の事例をあげるならば、2016年の展覧会「美をあふぐ 華麗なる巨匠たちの扇の世界」で展示された、簡易保険事業の記念品の扇面に使われた日本画家の作品がある。事業の中で作られる、ある意味些細な記念品に対しても、国を代表する美術家を長く起用した当時の通信当局の姿勢からは、自らの制作物を美しく飾る配慮を徹底する、官庁にはめずらしいある種の伝統があるように思われる。

ここで紹介する雑誌『郵政』の表紙画も、そのような通信事業の文化的伝統に由来すると思われるコレクションである。2019年の企画展「郵便屋さんの図像学」で一部の作品が展示されたが、コレクション全体としてはまだあまり知られていない。個々の作品名称、作者等情報の一部は、郵政博物館のウェブサイトの「収蔵品のご紹介」ページ (<https://www.postalmuseum.jp/collection/>) から検索可能なデータベースに登録されているが、現状では、伝来のまとまりを認識するのは困難である。以前から博物館の収蔵庫で他の資料を閲覧する際に、その存在が気になっていたのも、この場を借りて特色の一端をご紹介してみたい。

2 雑誌『郵政』

雑誌『郵政』は、1949年(昭和24)8月に発刊された郵政省の機関誌である。主な読者は郵政省職員で、民間企業の社内誌にあたる。第二次大戦後、通信省の分割によって設けられた郵政省は全国の郵便局を所管する巨大な官庁で、発足時に大規模な人員整理が図られたものの、26万人を超える職員をかかえていた。その事業の周知や職員の資質向上に関する情報を継続的に提供するための手段として定期刊行物を発行するのは、当時としては自然な発想であった。

創刊時の郵政省職員の回想によると、当初同じような考えで刊行物が局ごとに発行されて混乱を生じたため、初代の大員であった小沢佐重喜の裁定で、省全体の機関誌として『郵政』を

1 通信省編：通信事業史 第1巻、1940、p 770。

発刊し、人事部が編集に当たることとなったという⁽²⁾。編集は一貫して人事部（後に人事局）内の課が担当し、発刊から1960年代の初め頃までに、訓練課→能率課→人事課→職員訓練課と変遷している。発行は、しばらく省の直営であったが、途中から郵政弘済会が発行元となった。

1960年前後の誌面を通覧してみると、頁数は通常の方で70～80頁、「増大号」「特集号」と銘打った号が最大100頁程度で、官庁の月刊誌としてはかなりのボリュームである。発行部数は1960年代前半で45,000部といい、中堅の商業誌に匹敵する。構成は、郵便、貯金、簡易保険、通信など郵政事業に関する話題の解説を柱としながら、職員の教養に資するための政治や経済の動向に関する論説、書評や映画評など文化芸術に関わる記事、作家や学者による随筆、短歌・俳句、漫画など多彩な内容が盛り込まれている。また、労使関係上の法律問題など現場での課題をめぐる記事も含まれる。読者である職員側の参加を促す文芸作品や美術作品のコンテストの結果や職員からの投稿も掲載された。グラビアページでは、新営の施設の紹介や職場のルポルタージュ的な記事などを載せている。100号、200号といった区切りの号には、過去に編集を担当した職員の回想記事があるが、そこで異口同音に語られるのが「教養」という言葉である。まだ社会全体が貧しく、高等教育や知的な情報を得る機会も限られていたこの時代、職員の教育、資質向上を図る部署が「教養課」（逓信省時代）「教養係」と名付けられたくらい、勤労者に「教養」を提供することは、行政運営や企業経営に求められた重要な役割の一つであった。「『郵政』を通じて、職員の知識、教養を或る水準まで引きあげよう」⁽³⁾、「わが部内における、唯一最高の教養機関誌」⁽⁴⁾、「移り変りのはげしい世相に処し郵政行政の変遷に応じて、よく教養誌としての面目を発揮」⁽⁵⁾といった編集担当者の述懐からは、想定された読者層に実際にどれだけ届いたかはともかく、刊行する側の意気込みと気負いが感じ取れる。

3 『郵政』表紙原画の概要

『郵政』は一部の時期を除き⁽⁶⁾、創刊時からほぼすべて洋画（図1、2）または版画（図3）が表紙を飾っていた。1949年創刊号から1954年12月号までの約4年半は、毎号三雲祥之助の作品が掲載された。三雲祥之助（1902-82）は、春陽会を中心に活動した洋画家で、1951年から77年まで武蔵野美術大学教授を務めている⁽⁷⁾。

1955年からやや方針を変え、1956年からは毎月異なった作家に依頼した作品を掲載する、という方針がとられるようになった。原則として作家に新規の制作を求めており、原画が多数残される原因となった。表紙への絵画の掲載と併せて、ほとんどの号に「表紙のことば」「表紙について」という作家自身による制作意図の説明や感想を述べた短い文章が載せられており、制作の動機や背景がうかがえることもある。

表紙の素材として利用された後の原画は、もっぱら実用に供される備品として省内で管理されていたようで、実際に長く執務室の壁にかけられていたものがある一方で、途中で廃棄されるものもあったとみられる。現存する作品については、あるいは郵政省時代に博物館（当時の

2 白根玉喜：「郵政」誌百号を迎えて、郵政100、1957。

3 泉秀則：思い出（「『郵政』編集の思い出」より）、郵政200、1966。

4 武田功：その頃（「『郵政』編集の思い出」より）、郵政200、1966。

5 注2に同じ。

6 例外は、写真を掲載したもの（1962年6月号と1965年7月号。いずれも撮影は田沼武能）と、欧州や日本の過去の名画を掲載したもの（1965年10月号、1966年1月号～2月号、4月号～12月号）、既刊の表紙集（1966年3月号、1974年7月号）である。

7 東京国立文化財研究所編：日本美術年鑑 昭和58年版、1983、p 282。



図1 『郵政』表紙原画（洋画の例）：寺内萬治郎「楽器を持つ少女」



図2 『郵政』表紙 1959年1月号



図3 『郵政』表紙原画（版画の例）：川西英「カナリヤ」（1956年4月号）

通信総合博物館)が収集していたものかと推測して、郵政博物館に受け入れ時期をお尋ねしたところ、積極的に収集していたものではなく、郵政省側からの意向で随時受け入れ、最終的には郵政民営化時に日本郵政の資産として移管され、博物館の管理に帰したということであった⁽⁸⁾。したがって、民営化までの伝来はあくまでも実用品としての位置付けであり、美術的なコレクションとしての扱いがされていたわけではなかったと考えられる。そのような条件下でも現在450点あまりの作品原画が残されており、大変意義深いことである。

これらの原画の中で、館外からの調査の手が及び、比較的世に知られているのは小磯良平の作品である。特に「郵便外務員を描く」(1972年4月号)は、小磯作品の総本山である神戸市立小磯記念美術館や兵庫県立美術館での展覧会への出品歴もある。一方でその他の大半の作品は、公開されている情報が少ないこともあって、ほとんど存在を知られない状態かと思われる。

原画は、制作時の木枠に張ったキャンパスの状態では伝わっているもの(一部板絵がある)と、額装されたものがあり、前者が多くを占める。もともと表紙に利用する前提なので4号、6号といった小品が大半である。額装には一部、作家の意向によるものが含まれているとみられる。たとえば後に見る1960年12月号に掲載された須田剋太の作品(整理番号:9001-0058)は、作家自身が記す「表紙絵について」に、「今年の十月十日-十六日迄銀座文芸春秋画廊、中林画廊で、東京での初めての個展をした。その間に出来たグワツシュの一枚です」とあり、現存する額が作品とよく調和しているところから、制作後額装の状態では納品されたものと推測される。

画題はさまざまであるが、郵政省からの依頼を意識して、外務員など郵便をテーマにした例が少なからず見られる。先述の小磯良平の他に、朝井閑右衛門「郵便配達員」(1963年2月)、中村琢二「郵便外務員」(1969年4月)、中本達也「顔(郵便外務員の顔)」(1970年4月)、重達夫「ポストのある風景」(1977年4月)などがこれにあたる。その他、国内外の風景、静物、人物(ほとんどが女性像)が大半を占めるが、能楽などの古典を題材にした作品や後述する抽象画なども含まれている。

創刊からの『郵政』表紙画の作家は、複数回登場した者もかなりいるため、全部で約440名になるが、その選択には一定の注意が払われていたようである。まず作家の社会的評価の指標の一つとして叙勲などの栄典をとりあげてみよう。日本で美術家の最高の栄典は文化勲章と文化功労者であるが、確認すると原画の残る作家のうち21名が文化功労者に選定され、そのうち9名が文化勲章を受章している(表1)。また、日本芸術院会員に選ばれた者も35名(文化功労者と重複を含む)に及ぶ。ここで重要なのは、『郵政』編集部は、表紙を決める時点で功成り名遂げた大家を選んだわけではなく、多くは受章や選定のかなり以前に制作が依頼されたものだ、という点である。たとえば1964年3月号に「桃畑」が載った牛島憲之はこの時東京芸大教授で、画家としての地位は確立しているが、文化功労者の選定は'82年、文化勲章は翌'83年と20年近く後のことである。火山を画題とした作品で高い評価は得ていた片岡球子の場合も、1965年1月号に「西湖の富士」が載るが、文化功労者は'86年、文化勲章の受章は'89年とはるか後になる。

つまり、『郵政』表紙画を引き受けていたのは、主に画壇での評価が定まっはいるが、いわゆる大家には至らない作家で、その中から芸術院会員・文化功労者・文化勲章受章者が一定の割合で輩出するような層であった、と言えることができる。この点は、各作家の作品の東京・京都の国立近代美術館への収蔵の有無を確認しても、同様の傾向が見られる。昭和末年(1988)までに『郵政』に表紙画を提供した作家のうち、三分の一ほどは国立近代美術館のコレクシヨ

8 井上卓朗氏のご教示を得た。

『郵政』掲載号	作品名	作家名	文化功労者	文化勲章
1955年7月	鳥と手紙	脇田 和	1998	
1961年1月	鳥(無題)	脇田 和		
1957年7月	女	東郷 青児	1978	
1957年8月	街	福沢 一郎	1978	1991
1958年6月	花	三岸 節子	1994	
1958年9月	ヨットハーバー	小磯 良平	1979	1983
1972年4月	郵便外務員を描く	小磯 良平		
1958年12月	カトレア	田村 孝之介	1985	
1960年3月	光(ひかり)	難波田 龍起	1996	
1960年8月	(無題)	堂本 尚郎	2007	
1963年1月	アネモネ	鈴木 信太郎	1988	
1964年3月	桃畑	牛島 憲之	1982	1983
1965年1月	西湖の富士	片岡 球子	1986	1989
1967年3月	早春	田村 一男	1992	
1968年1月	箱根の富士	田崎 広助	(1975)	1975
1979年8月	初夏の浅間山	田崎 広助		
1970年6月	アルプスの麓	高田 誠	1987	
1970年10月	海辺	吉井 淳二	1985	1989
1972年6月	金沢のひと	高光 一也	1986	
1979年1月	赤富士	小松 均	1986	
1980年1月	下諏訪の富士	田村 一男	1992	
1981年6月	若鮎	大山 忠作	1999	2006
1984年9月	紅濁葵	大山 忠作		
1982年2月	神々の座	福王寺 法林	1998	2004
1986年12月	胡蝶蘭	松尾 敏男	2000	2012

表1 『郵政』表紙画家のうち文化勲章受章者・文化功労者

ンに作品が収蔵されており、戦後各時期のいわば「全国区」に属する作家の割合が多いのである。

第二次大戦後の美術団体は、戦前の官展（文展、帝展）の流れを汲む日展系の団体と、そこからの影響を脱して活動を図る在野系の団体に大別されるが、『郵政』表紙画の場合、作家が特定の団体や系統に偏ることはなく、代表的な団体を万遍なく網羅しているようである。この点から見ると、制作の依頼が特定の団体や人脈に依存していた可能性は低い。ある意味では、団体展で活動した主要な作家をかなり網羅した戦後洋画壇の縮図のようなコレクションと評価することも可能であろう。

雑誌の表紙に絵画作品を載せることは昔も今も多く、画家の仕事の一類型としても珍しくない。官公庁の出版する雑誌も例外ではない。よく見られる形態は、ある刊行物に対して一人の画家が継続的に提供するケースである。たとえば、雑誌『更生保護』は、法務省の所管する更生保護協会の機関誌であるが、二紀会理事長を務めた宮永岳彦（1919-87）が、1952年から30年以上にわたって表紙画を提供しているし⁹⁾、既述のとおり『郵政』自体も、創刊からしばらくは三雲祥之助が一手に引き受けていた。一方、郵政省の外郭団体であった通信協会の『通信協会雑誌』も、1952年頃から現在に続く後継誌の『通信文化』に至るまで表紙に絵画を載せているが、こちらは基本的に読者が寄せた作品であり、趣味の発表の場として機能していた。また、すでに美術館のコレクションとなっている作品から選んで掲載するという事例もあるだろう。しかし、月替わりで全国的な画壇の第一線で活動していた画家に新作を委嘱し、数十年に

9 秦野市立宮永岳彦記念美術館：宮永岳彦記念美術館だより10、2018。

わたって掲載した刊行物は、商業誌を含めても他に例が少ないと思われる。編集側の立場からすれば、一人の作家に長期間依頼するほうが実務的な負担は軽くなるし、単に表紙を華やかにできればよいというのであれば、読者層からの公募にして積極的に応募するアマチュアが喜ぶ場にするほうが利益は多い。あえて、手間暇も経費もかかるプロの画家の作品掲載を続けることが可能だったのは、戦後から高度成長期にかけて豊かになっていった政府機関の余裕とも言える。

ところが不思議なことに、表紙画が月替わりになって以降の編集担当者の回想には、表紙画の調達に関する話題は全くでてこない。これだけの幅広い作家に制作を依頼していたにしては、担当職員からはほとんど印象が出ていないのである。創刊400号を記念した1982年11月号の座談会で「幸い表紙は創刊のときから、先日故人になられた三雲祥之助先生が協力してくださっており、その影響もあって、著名な先生の絵を毎月飾ることが出来ました」と、さらりと回想されている程度である。画家にとって、自分の作品が官庁刊行物の表紙を飾るのは、それなりに利益もあり、名誉と感ずることもあったであろうから、依頼の交渉は比較的容易だったかと思われるが、そこにたどりつくまでの各作家へのルートを、事務官のみで構成された人事局内の編集部が、常に確保していたとは想像しづらい。編集部と画壇の間で、ここで言及されている三雲祥之助のような、専門家の継続的な関与が推測されるのである。

4 「キュレーション」の場としての表紙

『郵政』表紙をギャラリーに見立てると、ある種の「キュレーター」がいたのではないだろうか。というのも、時期によって一定の企画性が見受けられる場合があるからである。一つの顕著な例として1960年（昭和35）一年分の表紙画を見てみよう（表2）。この年は12か月分すべてが抽象画で占められている。第二次大戦後の欧米で「アンフォルメル」と呼ばれた抽象表現美術の動向は、1950年代の後半に日本に紹介されて多くの画家に衝撃を与えており、1960年はまだその影響がきわめて大きかった時期である。12人の作家のうち、岡本太郎、難波田龍起、杉全直、山口長男、斎藤義重、堂本尚郎、岩崎鐸、江見絹子、須田剋太は、いずれもこの時期もっとも先鋭的に活動し、後世に戦後の抽象美術を代表する作家として名を残している人々である。このような人選は、当然依頼した側が同時代の画壇の動向をよく認識しており、かつある程度の人的つながりを持っていて初めて可能になったことであろう。とりわけ、堂本尚郎は数年来フランスを拠点に活動し、この年は日本で初めて開催する個展のために一時帰国していた折で、そのようなタイミングをねらって制作を依頼するというきめ細かい対応からも、依頼者がかなり事情に通じていたことがうかがわれる。もう一つ興味深いことに、この年の『郵政』10月号には、次のような現代芸術に関する特集記事が掲載されている。

- ・現代建築の鑑賞……………薬師寺厚（郵政大臣官房建築部設計課長）
- ・抽象絵画について……………嘉門安雄（国立西洋美術館事業課長）
- ・二十世紀の新しい音楽……………大宮真琴（成城大学助教授）

薬師寺厚は郵政省職員だが、東京帝大建築学科卒で丹下健三と同期に当たり、吉田鉄郎や山田守からの通信建築の伝統に連なる人である。その父薬師寺主計も建築家であった。嘉門安雄はこの時創立直後の国立西洋美術館に勤め、後にプリヂストン美術館長となった。大宮真琴はハイドンの研究者として知られ、この時は成城大学助教授、後にお茶の水女子大学、沖縄県立芸術大学の教授を務めた。いずれの記事も、20世紀のそれぞれの分野の動向を短く解説しようとしたものだが、特に嘉門の「抽象絵画について」は「私たちが、うっかり『現代の絵画』な

1月号		(無題)	岡本太郎	2月号		玄	青井辰雄
3月号		光 (ひかり)	難波田龍起	4月号		(無題)	杉全直
5月号		陽	山口長男	6月号	(原画なし) 	(無題)	斎藤義重
7月号		(無題)	佐野繁次郎	8月号		(無題)	堂本尚郎
9月号		壁	岩崎鐸	10月号		東洋	江見絹子
11月号		暦	青木義照	12月号		(無題)	須田剋太

表2 1960年(昭和35)の『郵政』表紙画

どということ、多くの人から『ああ、あの何を描いてあるのか解らない抽象絵画のことか』と、きめつけられる」という書き出しで始まって、現代における抽象絵画の意味を解説しており、本誌の表紙画とセットで現代芸術に関する一つの教養記事となることが意図されているように思われる。

このような表紙画の「キュレーション」ができた人物の候補としては、1960年11月号の表紙画作家でもある青木義照（1932～2008）のような、郵政省内のデザイナーである技芸官があげられる。青木の場合、公務で切手の図案などの企画に携わる傍ら、行動美術協会に所属する洋画家としても創作活動を行っており、画壇における人のつながりは考えられるところである。もし、このような想像が認められるのであれば、『郵政』表紙画コレクションが、長い通信事業の文化的伝統を反映した蓄積の一つだと考えることは、あながち的はずれた見方ではないだろう。より検討の深まることを期待したい。

（謝辞）『郵政』表紙原画および関係資料の閲覧にあたっては、郵政博物館の田原啓祐氏・倉地伸枝氏のご協力をいただいた。また、雑誌刊行の時代的な背景と青木義照の経歴については、井上卓朗氏に多くのご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

（たらしま さとし 国立近現代建築資料館主任建築資料調査官）